富山市埋蔵文化財調査報告１

富山市小西北（こにしきた）遺跡
発掘調査報告書

― 特別養護老人ホーム増設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 ―

2005

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告１

富山市小西北（こにしきた）遺跡
発掘調査報告書

― 特別養護老人ホーム増設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 ―

２００５

富山市教育委員会

例　言

1．本書は、富山市小西地内に所在する小西北遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、社会福祉法人アルペン会が実施する特別養護老人ホーム建設に伴うもので、富山市教育委員会の監理のもと㈱パスコが実施した。
3．調査の概要については、以下のとおりである。

所　在　地　富山県富山市小西170番地
調 査 面 積　450㎡
現地調査期間　平成17年３月14日～平成17年４月13日
整 理 期 間　平成17年４月14日～平成17年10月31日
監 理 担 当　小林高範（富山市教育委員会）
調 査 担 当　伊藤雅乃　秀嶋龍男（㈱パスコ）

4．現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々・機関の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。

野村土建㈱、ふじた航空写真、㈱古環境研究所、㈱埋蔵文化財サポートシステム

5．本書の執筆･編集は、IIを古川知明（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）、他を秀嶋が行った。
6．自然科学分析については、㈱古環境研究所に依頼し、土壌の花粉分析、木製品・自然遺物の樹種同定を行い、本書第IV章に掲載した。
7．本調査にかかわる図面・写真・出土品等の資料は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。

目　次

I　遺跡の位置と環境 …… 1
II　調査に至る経緯 …… 2
III　調査の概要 …… 3
(1)　調査の経過と層序 …… 3
(2)　遺　構 …… 5
(3)　遺　物 …… 9
IV　自然科学分析 …… 13
(1)　小西北遺跡における花粉分析 …… 13
(2)　小西北遺跡における樹種同定 …… 20
(3)　小西北遺跡から出土した昆虫遺体の同定 …… 23
V　総　括 …… 24
写真図版 …… 27
報告書抄録 …… 35

Ⅰ　遺跡の位置と環境

小西北遺跡は、富山市中心部から北東約６㎞に位置し、富山市小西170番地内に所在する。

遺跡は、常願寺川左岸の扇状地に点在する微高地のひとつに営まれ、標高８ｍに立地している。

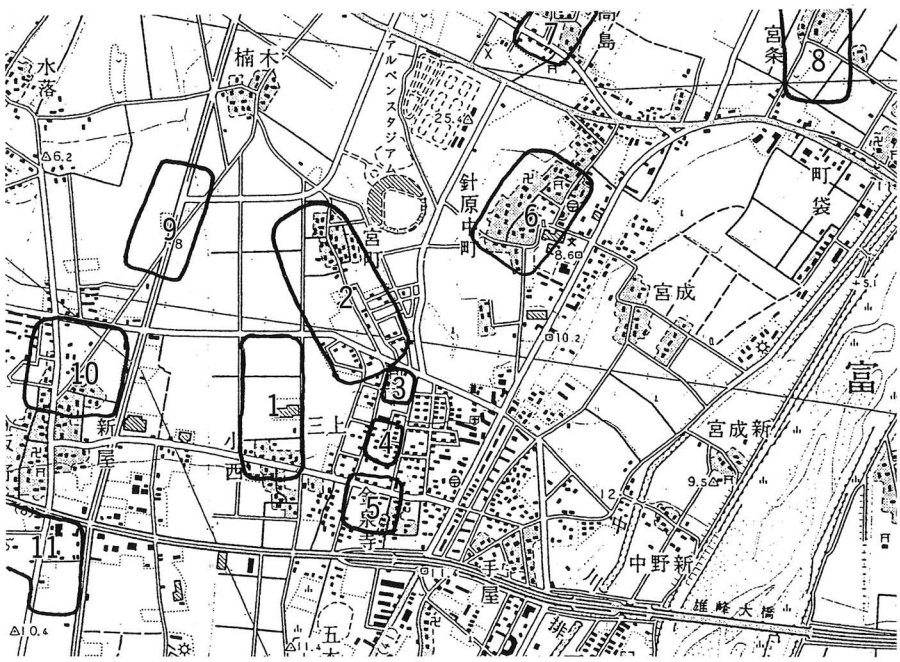
遺跡周辺は水田地帯であり、周辺の標高は５ｍ～10ｍ前後で常願寺川下流域の低地帯が形成されている。当時は、現在よりも更に低湿地帯であったと思われ、そのことは遺跡土壌の花粉分析結果からも推定されている。イネ科やカヤツリグサ科など湿地的植生が見られ、オモダカ・ミズアオイ属などの水田雑草も認められており、水田稲作が行われていたことが判明している。（本書第Ⅳ章）

遺跡のすぐ北側には、弥生時代から戦国時代にかけての集落跡である宮町遺跡があり、その北東部には、戦国時代の越中守護代神保氏の館跡（針原館）と推測されている針原中町Ⅱ遺跡がある。また北西部には、古墳時代の集落跡が確認された飯野新屋遺跡が所在している。これらの周辺部にも原始・古代から中・近世までの遺跡が点在しており、常願寺川水系の沖積作用で形成された下流域の低地帯が開発・改良され、あるいはそのままの地形的条件を許容しながら海岸部から内陸部へと遺跡が展開していく様子が窺える。

また、当該地は扇状地端部の低地である為、豊富な湧水が見られる。これは、周辺遺跡の発掘調査結果でも多数の井戸跡や用排水の役割を持った溝が検出されていることからも言える。このことは、当地帯が水田耕作に適しており、それを生産基盤としてこれらの遺跡が形成されていったと推察できる。

遺跡周辺の森林植生ではスギ林が分布し、カシ・ナラ・クリ類も生育していたことが判明している。（同上）遺構出土の加工木材は、すべてスギ材が使用されており、周辺のスギ林から調達されたものと思われる。

このように豊富な自然環境のもと、社会的条件が加味されつつ古代から中世にかけて小西北遺跡が形成されたと言える。



1．小西北遺跡

2．宮町遺跡
（弥生～中世）

3．三上遺跡
（弥生～中世）

4．三上Ⅱ遺跡
（弥生～古代）

5．金泉寺遺跡
（古代）

6．針原中町Ⅰ遺跡
（弥生～中世）

7．高島遺跡
（縄文～平安）

8．宮条南遺跡
（縄文～中世）

9．飯野新屋遺跡
（古墳～中世）

10．新屋殿田遺跡
（古墳～中世）

11．飯野小百苅遺跡
（古代～中世）

第１図　周辺の遺跡分布図（１：25,000）

II　調査に至る経緯

小西北遺跡は、昭和63年～平成３年に富山市教育委員会が実施した市内の分布調査で発見された遺跡である。その際には、土師器や須恵器、珠洲焼が採集され、奈良・平安・中世の散布地とされた。遺跡は№212小西北遺跡として富山市遺跡地図に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。この時点での埋蔵文化財包蔵地の範囲は34,000㎡である。

平成５年11月、小西地内において社会福祉法人アルペン会により特別養護老人ホーム建設計画に伴う試掘確認調査を実施し、建設予定地（12,146㎡）全域に遺跡の所在が確認された。

協議により、平成６年４月～６月に特別養護老人ホーム棟建設部分2,890㎡、平成10年４月～６月に老人福祉施設1,411㎡の発掘調査を行い、7,845㎡を盛土保存した。

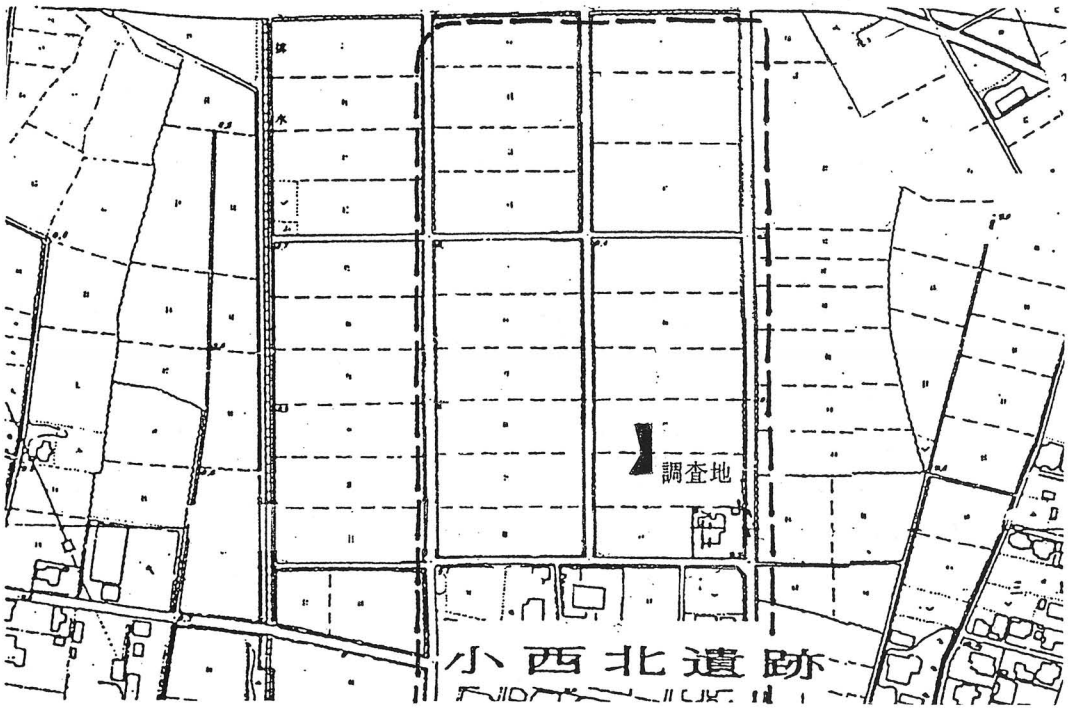
発掘調査では縄文時代から中世の遺構・遺物が検出され、特に堀を巡らした戦国期の方形居館跡の検出は特筆される。

これらの試掘確認調査の結果に基づき、小西北遺跡の範囲を南北に広げ、78,000㎡とした。この範囲は、平成11年３月をもって『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載した。

平成16年９月、社会福祉法人アルペン会より盛土保存部分において、新たにデイサービス・ショートステイ施設の建設計画が立案された。当該地は試掘で埋蔵文化財野所在賀確認されていた部分のため、工事計画と調整した結果450㎡の発掘調査が必要と判断された。発掘調査は緊急に民間発掘調査機関に委託して実施することで合意し、平成17年２月、社会福祉法人アルペン会、市教委、株式会社パスコの三者で協定を締結し、同年３月14日から発掘調査に着手した。

現地発掘調査は平成17年４月13日まで約１ヶ月かけて実施した。

出土品整理はその後引き続き行い、平成17年10月31日まで実施し、本書を刊行して完了した。



第２図　発掘調査区域（１：3,000）

III　調査の概要

(1)　調査の経過と層序

調査の経過と調査方法

発掘調査は、平成17年３月14日から４月13日まで行った。調査対象面積は、約450m²である。

作業は、重機により遺物包含層の上面まで表土（1.8m～２m）を排出し、人力による遺物包含層の掘削を行った。包含層中の遺物は、１mグリッドごとに取り上げ、その後遺構の検出作業を行った。当該地は湧水が著しい為、発掘区縁辺部に水切り溝を布設し24時間の排水ポンプによるポンプアップを行いながらの作業となった。遺構は略号による遺構番号をつけ、各遺構の土層断面図や遺物出土状況の平面図を作成しながら掘削した。遺構の実測に関しては、個別実測の他に、航空写真測量によって全体測量図を作成した。

調査区の基準杭は、三等･四等三角点からの公共座標値を移し、水平基準は一等水準点を使用した。

層　序

調査区の基本層序は、表土層を第１層として７層まで確認している。（写真図版２）

第１層：厚さ１～1.2mほどの暗オリーブ褐色土で盛土層である為砂利・砂が多数混じっている。

第２層：厚さ15～20cmほどの黒褐色ないし灰黄色の粘質土で、旧耕作土である。２層から５層までの水田土壌は、きめ細かいシルト質である。

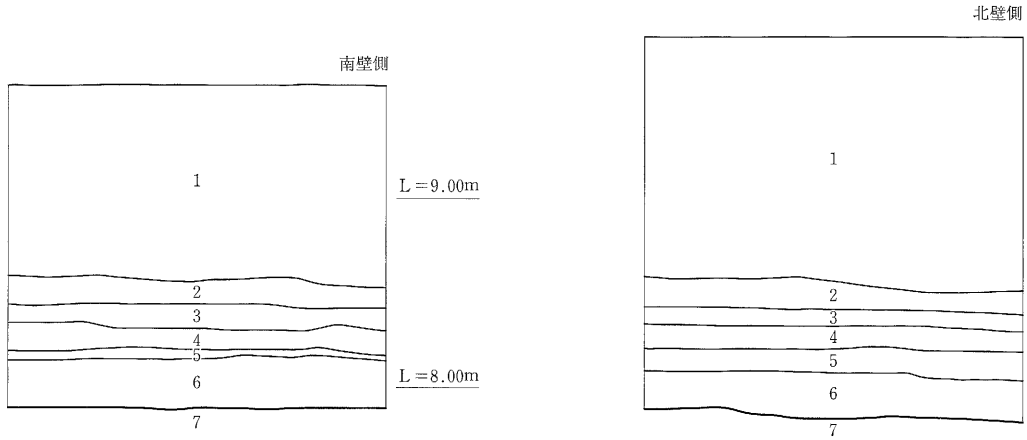
第３層：厚さ10cmほどのにぶい黄色粘質土で、２層の床土である。

第４層：厚さ15cmほどの暗灰黄色粘質土で、旧耕作土である。

第５層：厚さ５～10cmほどの黄褐色粘質土で、４層の床土にあたる。

第６層：厚さ20cmほどの黒色土で、遺物包含層である。

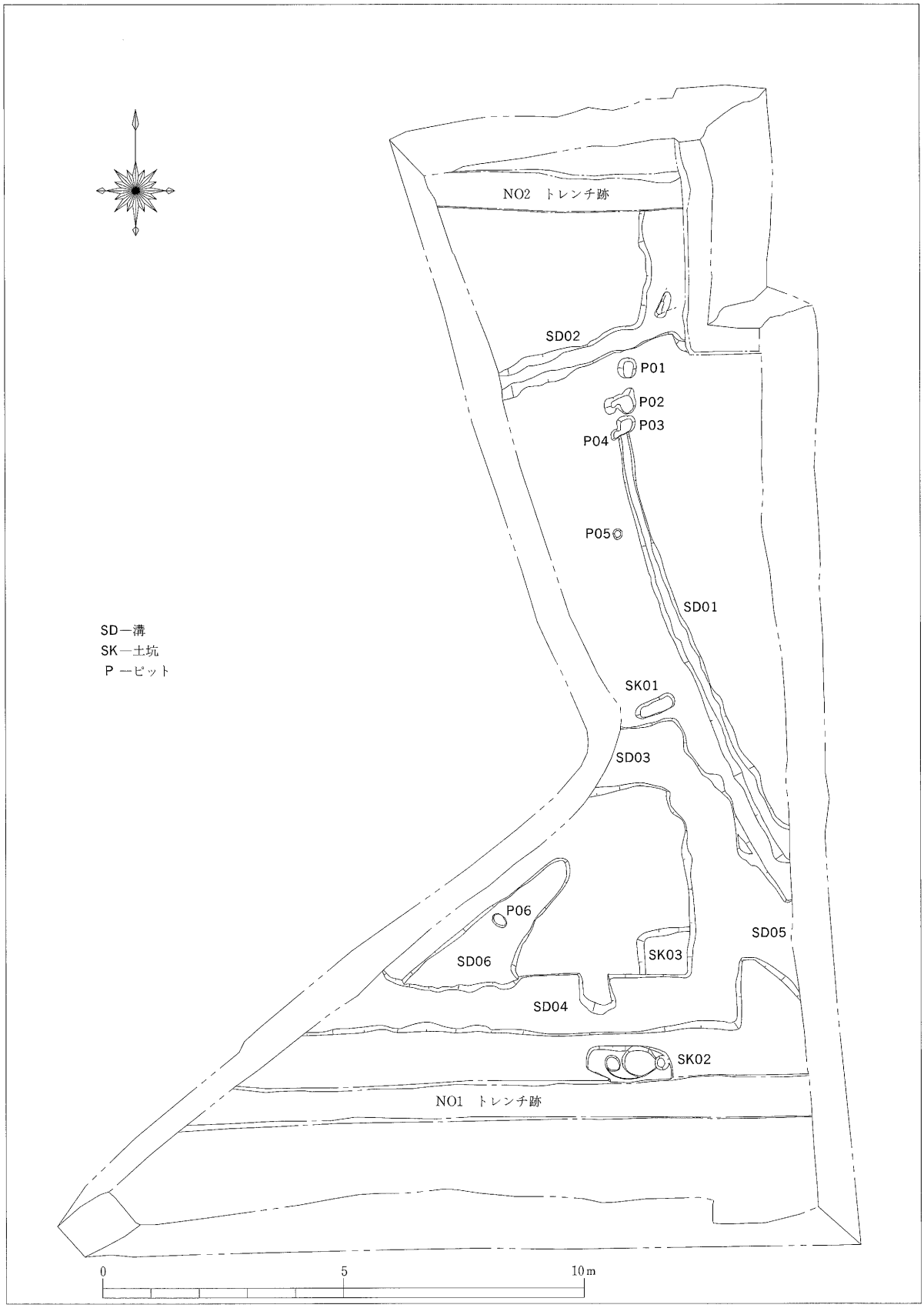
第７層：遺構検出面にあたり、橙色土が基層となっている。７層以下は、粘土層の互層が続き、この面から下で湧水が見られる。この第７層は、砂礫を含まず硬化面も見られることから、地業による整地面と判断される。



1　暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）土　盛土層　砂利・砂多数混じる。
2　黒褐色（2.5Y 3/1）土　旧耕作土　きめ細かいシルト質。
3　にぶい黄色（2.5Y 6/3）土　床土　きめ細かいシルト質。
4　暗灰黄色（2.5Y 5/2）土　旧耕作土　きめ細かいシルト質。
5　黄褐色（2.5Y 5/3）土　床土　きめ細かいシルト質。
6　黒色（5Y 2/1）土　遺物包含層　橙色（7.5YR 6/8）土をわずかに含む。
7　橙色（7.5YR 6/8）土　遺構検出面

1　暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）土　盛土層　砂利・砂多数混じる。
2　灰黄色（2.5Y 6/2）土　旧耕作土　きめ細かいシルト質。
3　にぶい黄色（2.5Y 6/3）土　床土　きめ細かいシルト質。
4　暗灰黄色（2.5Y 5/2）土　旧耕作土　きめ細かいシルト質。
5　黄褐色（2.5Y 5/3）土　床土　きめ細かいシルト質。
6　黒色（5Y 2/1）土　遺物包含層　橙色（2.5YR 6/8）土をわずかに含む。
7　黒色（7.5Y 2/1）土　遺構検出面　橙色（7.5YR 6/8）土を多量に含む。

第３図　基本土層状況（１：40）



第 4 図　発掘調査区平面図（1：100）

⑵ 遺　構

遺構は、発掘区の南半部を中心として溝、土坑、ピットが検出された。遺構検出面は、北側へ向かって緩やかに傾斜しながら低くなっており、全体的に黒色・黄灰色粘土層上に橙色土を盛って叩き締めた様な硬化面が認められる。湿潤地の土地改良の為に、地業が成されたものと思われる。

SD01（第４・５図）　発掘区の南東から北西へ向い、緩やかにカーブしながら北側へ延びている溝である。幅40㎝、深さ10㎝で断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒色土の単層である。SD02を切っている。第１次・２次調査の遺構配置を見ると、この溝に続くと思われる遺構は見当らないので、それほど長い溝ではないと考えられる。

SD02（第４・５図）　発掘区北部に位置し、東西方向に延びている幅50㎝、深さ25㎝の台形状を呈する溝である。埋土は３層で最下層に砂質土の堆積が見られることから、流路としての機能を有していたと考えられる。またこの溝は、第１次・２次調査で検出された北西から南東へ延びる溝にほぼ直交する形で東へ延びており、その関連性が推測される。

SD03（第４図）　当初この溝は、SD04と同一のコの字状を呈する溝と考えられたが、発掘の結果直接的には連続しないことが判明した。幅1.2ｍ、深さ15㎝の扁平な台形状を呈し、埋土は２層確認できた。１次調査で確認された堀跡や今回の調査で検出されたSD04と平行する形で掘られていることから、居館跡に付随する施設の一つと考えられる。

SD04（第４・５・６図）　発掘区南半部に位置し、幅1.3ｍ、深さ20㎝の扁平な台形状を呈している。埋土は、Ｌ字に折れ北へ延びている部分では３層、南側の東西に延びる所では２層の堆積が見られた。遺物の出土は、第１層が主体で２層にやや食い込んで出土する状況も見られる。土師器片、角柱状・板状木製品、自然遺物が出土した。SD05・06、SK3を切り、その方向性から見て第１次調査で確認された居館跡に付随するものと思われる。

SD05（第４・５図）　SD01と同じ方向性を持っているが、SD03・04に切られている。幅1.2ｍ、深さ20㎝で扁平な台形状を呈しており、３層の埋土堆積が見られた。この溝も第１次調査地までは延びず、短いものと判断される。

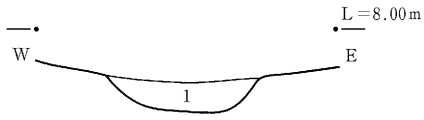
SD06（第４・５図）　発掘区南西部に位置し、SD04に切られる形で検出された。北東から南西へ延びる形を呈しているが、溝というより細長い土坑と呼ぶべきかもしれない。幅70㎝～１ｍ、深さ15㎝で中央に径20㎝、深さ15㎝のピットを１つ有している。北東部が狭く、南西部が広がる形状を呈しており、SD04に切られた部分を加えても溝の長さは５ｍを超えないものと思われる。

SK01（第４・７図）　発掘区の中央部、SD03の北側に位置する土坑である。幅30㎝、長さ80㎝、深さ15㎝で隅丸長方形を呈している。通常この形状は土壙墓として認識される場合が多いが、溝に付帯する遺構の可能性もある。

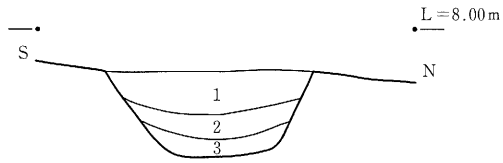
SK02（第４・７図）　発掘区南部、SD04の南側に位置する土坑である。幅70㎝、長さ180㎝、深さ15㎝である。南側はトレンチによって削平されているが、中に２つのピットを有する隅丸長方形の土坑である。中央のやや大きめのピットは、埋土の観察結果からすると他の２つのピットより後に掘り込まれている。位置的状況からすると、SD04に平行であり、またSD04内の張り出し部にも近く、この張り出し部と関連するSD04に付帯する遺構と考えられる。

SK03（第４・７図）　発掘区南部、SD04に切られる形で溝の内側屈曲部に位置している。現存する幅・長さは１ｍ、深さ10㎝であり、原形は方形を呈していたと思われる。

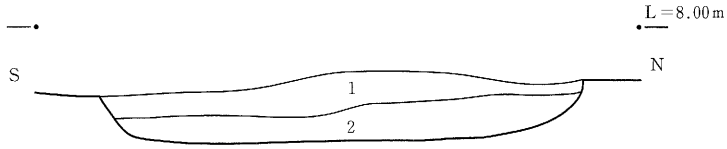
P01～05（第４図）　発掘区の北部、SD01のライン上に重複しており、溝が途切れた部分に集中しているピット群である。明らかにSD01を意識しており、関連性のある遺構として捉えられる。



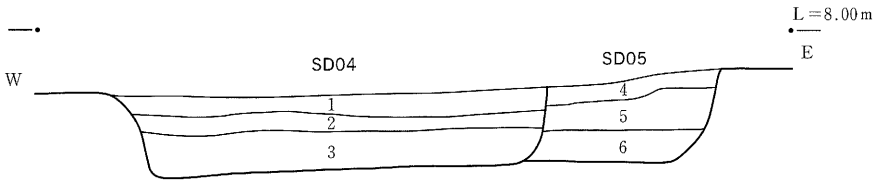
SD01
1　黒色（5Y 2/1）土［橙色（7.5YR 6/8）土多く混じる］



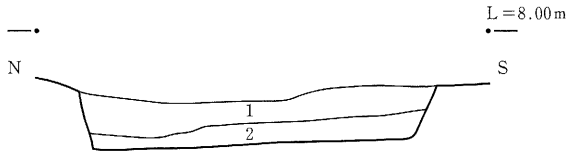
SD02
1　黄灰色（2.5Y 4/1）土［橙色（7.5YR 6/8）土 多く混じる。粘土質］
2　黒褐色（2.5Y 3/2）土［橙色（7.5YR 6/8）土 多く混じる。粘土質］
3　オリーブ褐色（2.5Y 4/3）土［砂質土］



SD04
1　黒褐色（10YR 3/1）土［橙色（7.5YR 6/8）土やや混じる。粘土質］
2　黒色（10YR 2/1）土　［粘土質］

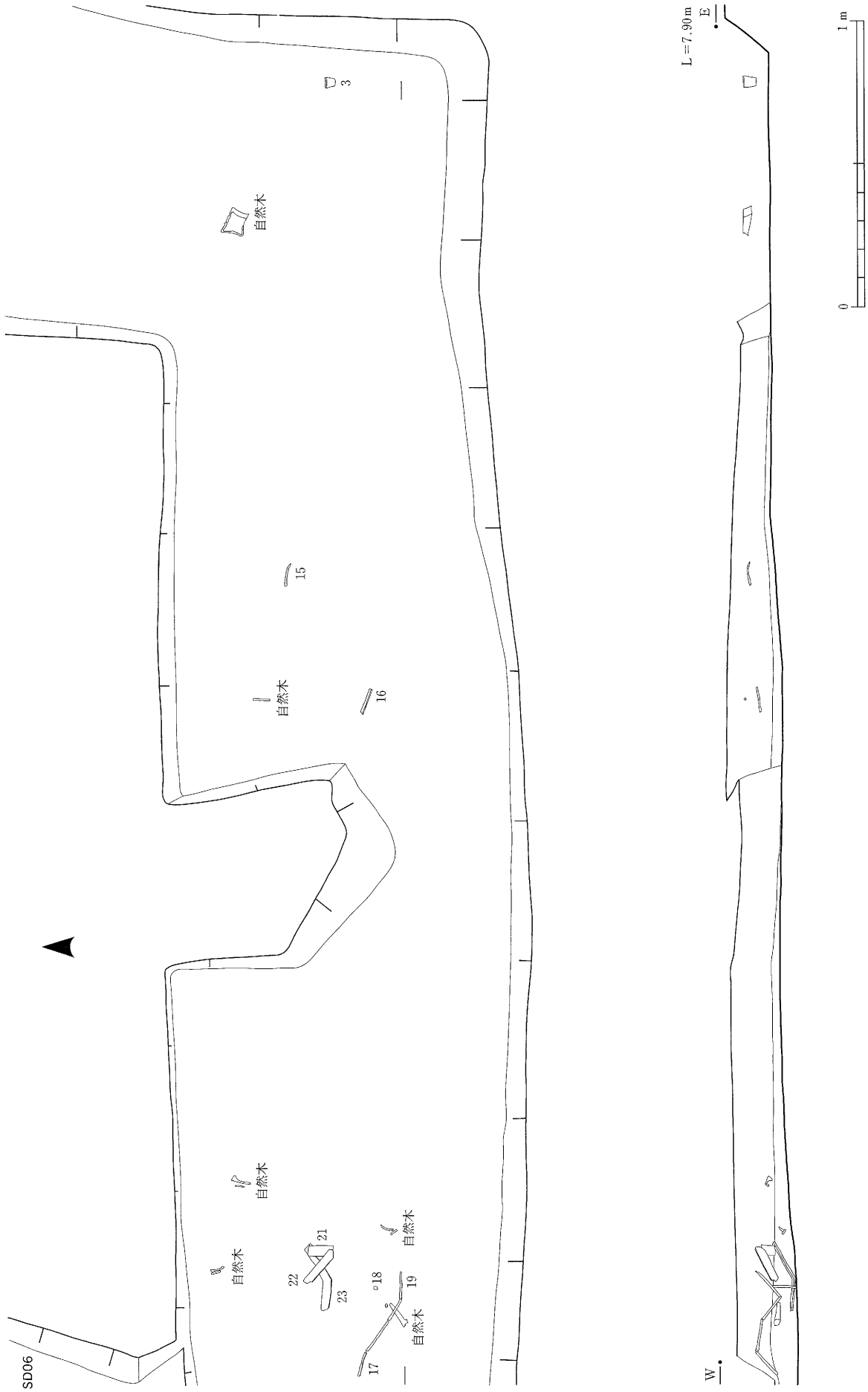


SD04・05
1　黒褐色（10YR 3/1）土［橙色（7.5YR 6/8）土やや混じる。粘土質］
2　褐灰色（10YR 4/1）土［粘土質］
3　黄灰色（10YR 5/1）土［粘土質］
4　黒褐色（10YR 3/2）土［橙色（7.5YR 6/8）土やや多く混じる。粘土質］
5　褐灰色（10YR 5/1）土［粘土質］
6　黄灰色（10YR 6/1）土［粘土質］

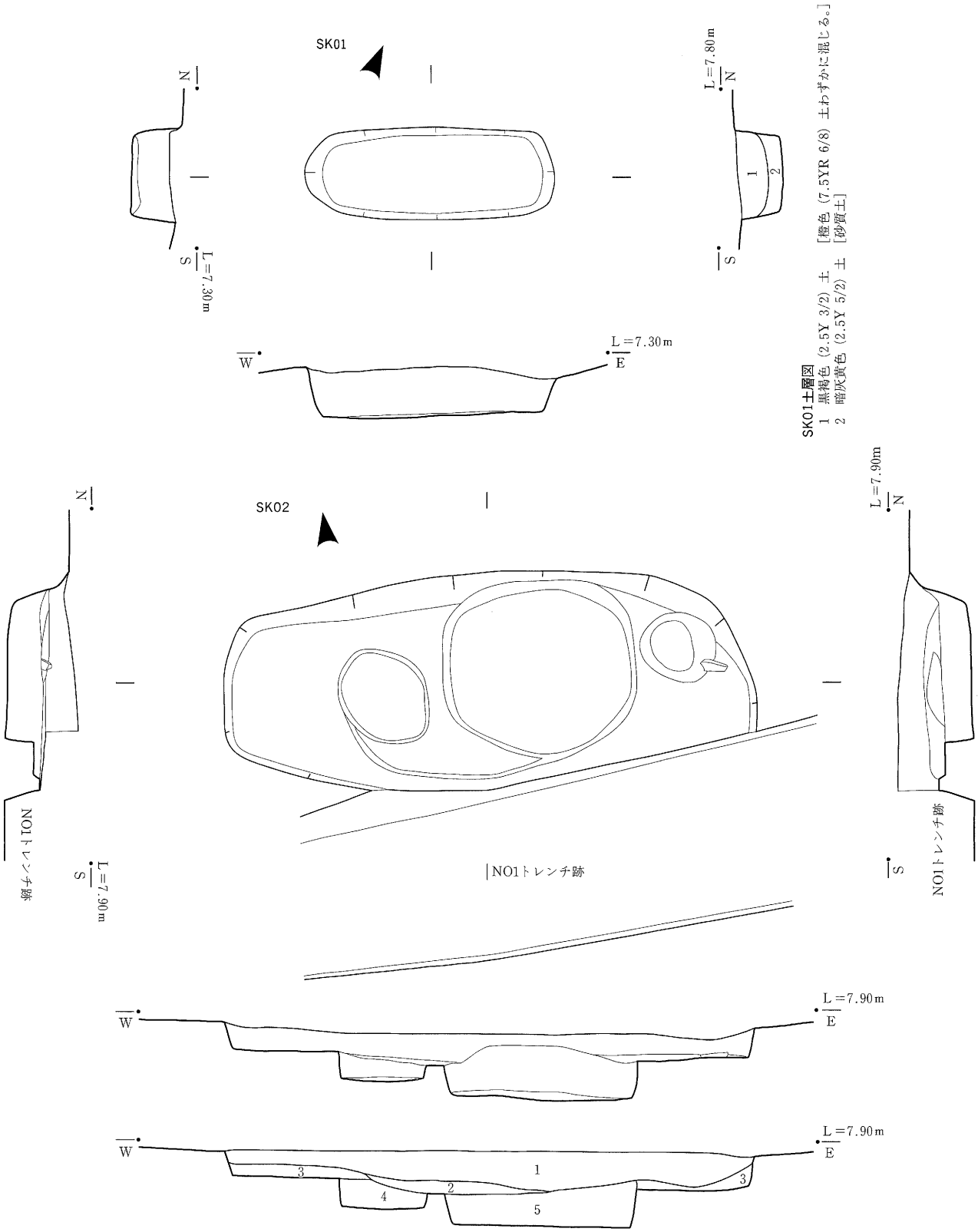


SD06
1　黒褐色（10YR 3/1）土　［橙色（7.5YR 6/8）土わずかに混じる。粘土質］
2　黄灰色（2.5Y 5/1）土　［粘土質］

第5図　SD01～06土層状況（1：20）



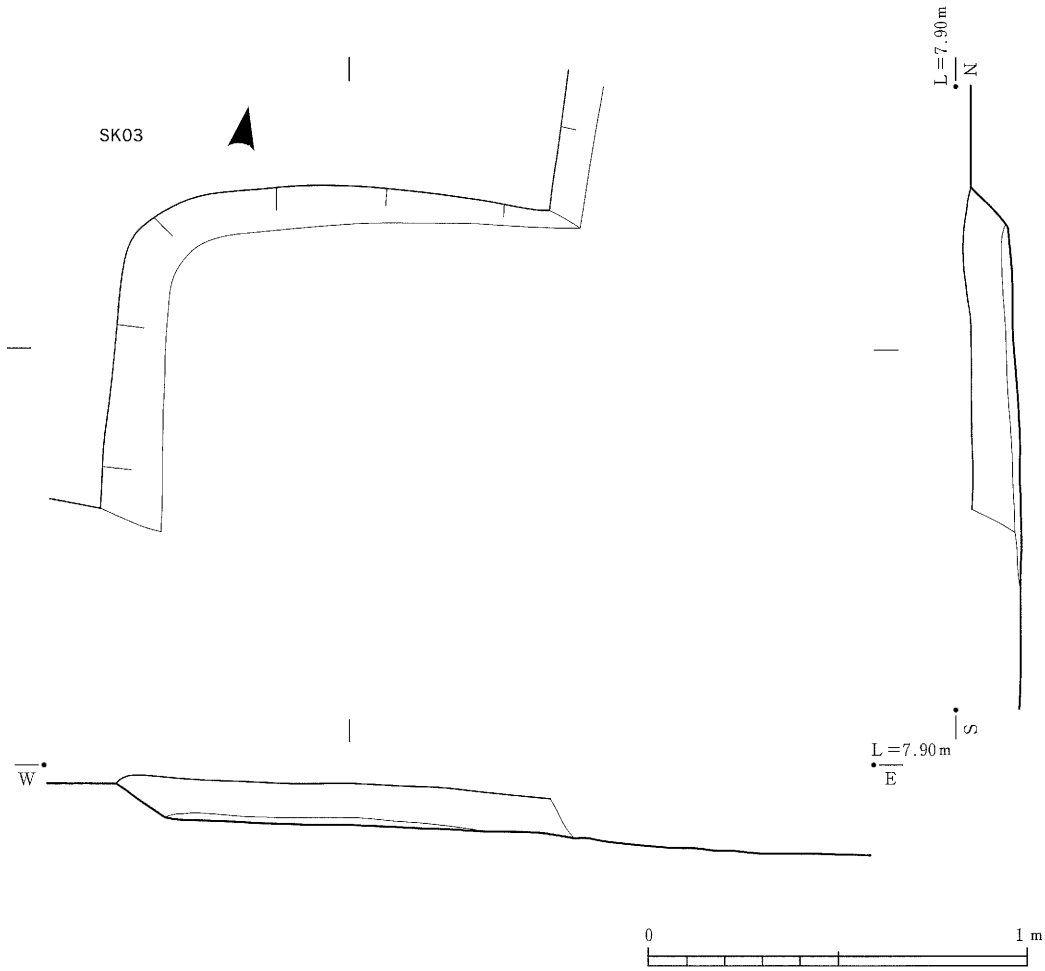
第6図　SD04遺物出土状況（1：20）



SK01土層図
1 黒褐色（2.5Y 3/2）土 ［橙色（7.5YR 6/8）土わずかに混じる。］
2 暗灰黄色（2.5Y 5/2）土 ［砂質土］

SK02土層図
1 黒褐色（2.5Y 3/2）土 ［橙色（7.5YR 6/8）土わずかに混じる。］
2 黒褐色（2.5Y 3/1）土 ［やや粘土質］
3 暗灰黄色（2.5Y 5/2）土 ［やや砂質土］
4 黄灰色（2.5Y 4/1）土 ［粘土質］
5 黄灰色（2.5Y 5/1）土 ［黒褐色（2.5Y 3/2）土ブロックをやや含む。粘土質］

第7図 SK01・SK02（1：20）



第8図　SK03（1：20）

今回検出された遺構に関しては、遺構の時期決定をする明確な資料の出土は見られない。しかしながら遺構の切り合い関係を見ると、大きく二時期として捉えることができる。一つはその主軸を東西あるいは南北にとる一群と、東西・南北からやや振れた主軸を持つ一群である。主軸をほぼ東西南北にとる遺構の方が新しく、第1次調査で確認された居館跡と同時期であろうと推測される。

(3) 遺　物

包含層中の遺物（第9図）　包含層・排土・トレンチ埋土からは、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲焼、国産陶磁器、土製品などが出土している。細かな小破片が多く、復元できるものはほとんど無い。主なものを図示した。

弥生土器（1）　排土出土の平底壺の底部片である。復元底径は、5.5cmである。

中世土師器（2）　NO1トレンチ埋土出土の非ロクロ成形による中世土師器の小皿で、口縁がやや外片している。体部外面に指頭圧痕が残る。

珠洲焼（4・5）　排土およびNO2トレンチ埋土出土で、いずれも甕の体部破片であり、胎土に海綿骨針を含んでおり、珠洲VないしVI期（吉岡1994）のものと思われる。

焼成粘土塊（6・7）　いずれも包含層出土で、大小の焼成粘土塊である。多面体で形成されているが、これは意識的な面取りではなく、粘土母塊から摘み取った時や手の平で握りしめた結果の面構成

である。ただし、おそらく底面と思われる一面に関しては、平面になるよう意識されている。この焼成粘土塊は、中世の遺構から時々出土するが、その機能・用途はまだ不明な点が多い。しかし、大抵の場合二次的被熱を受けた痕跡が認められることから、火熱作業時に使用されていたことが推測される。

製塩土器（8） 包含層から出土した輪積技法をのこす土師質土器の底部で、9世紀から10世紀代のものと思われ、全体に被熱している。

国産陶器（9・11） 9は排土から出土した越中瀬戸の皿で、内底面および高台部は露胎となっており、17世紀後半から18世紀のものと考えられる。11はNO2トレンチ埋土出土の越中瀬戸ないし美濃瀬戸と思われ、内外面とも鉄釉がかかる中型の壺ないし瓶の肩部と見られる。

輸入磁器（10） 排土出土の略化蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗で、15世紀代と考えられる。

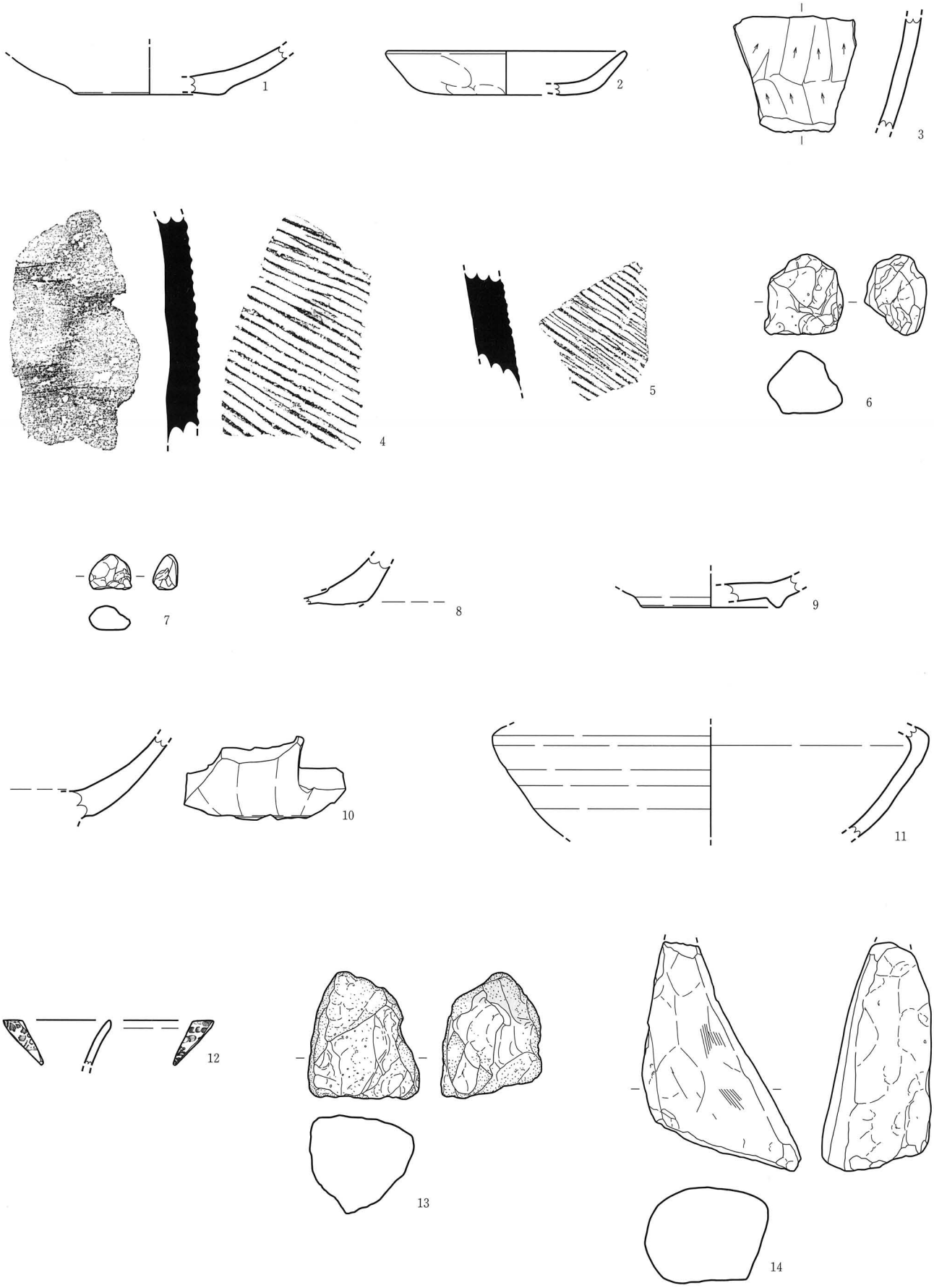
国産磁器（12） NO1トレンチ埋土出土の肥前染付の端反碗である。口縁内外面に葡萄文が描かれ，18世紀以降のものと思われる。

自然石（13・14） 13は包含層から出土した砂岩の自然石であるが、全体に被熱を受けている。14はSK02出土の花崗岩礫で、一部磨り石として使用した痕跡が認められる。

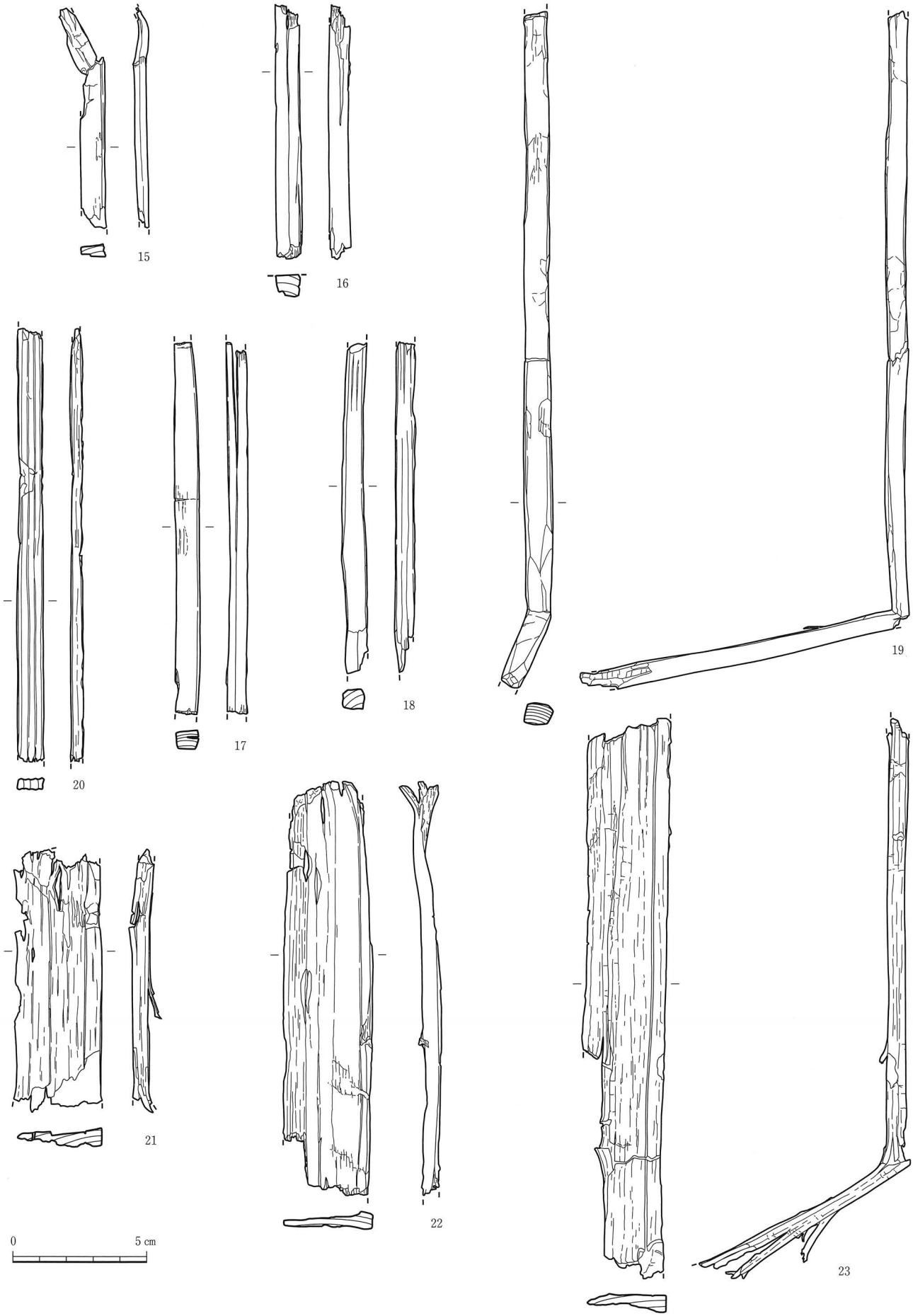
遺構の遺物（第9・10図） SD04から土師器、木製品、自然遺物が出土している。

土師器（3） 甕胴部片と思われ、内面はヘラケズリで調整されている。

木製品（15～23） 15から23までは、7～9㎜角の細木の木製品である。一端がやや細くなるよう加工されており、箸として使用されたものか。20から23は薄い板状の製品で、片方の側縁から5㎜のところに幅1㎜に満たない線彫りが見られる。何かの部材であろうか。これらは、いずれも杉材で作られている。



第 9 図　遺構・包含層中の出土遺物



第10図　遺構の出土遺物

Ⅳ　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

(1)　小西北遺跡における花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生･環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試料

分析試料は、基本土層（北壁、南壁）の６層（遺物包含層）と７層（遺構検出面）から採取された計４点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎する
2）水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
5）再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（―）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4．結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉21、シダ植物胞子２形態の計46である。分析結果を表１に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属―アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属―ケヤキ、エノキ属―ムクノキ、トチノキ、ミズキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科―イラクサ科

〔草本花粉〕

ガマ属―ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科―ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ササゲ属、アリノトウグサ属―フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1）基本土層北壁

7層では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高く、シダ植物胞子の割合も高い。樹木花粉では、スギを主に、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ハンノキ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、クリなどが出現する。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科、カヤツリグサ科が優勢であり、ヨモギ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが伴われる。6層では草本花粉の占める割合が高くなり、ソバ属、アブラナ科、ササゲ属などが出現する。

2）基本土層南壁

7層では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高く、シダ植物胞子の割合も高い。樹木花粉ではスギを主に、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、クリなどが出現する。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科、カヤツリグサ科が優勢であり、ヨモギ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが伴われる。6層では草本花粉の占める割合が高くなり、アブラナ科などが出現する。

5．花粉分析から推定される植生と環境

遺構検出面の7層の堆積当時は、イネ科やカヤツリグサ科などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、ヨモギ属などが生育する比較的乾燥したところも見られたと推定される。また、周辺では水田稲作が行われており、オモダカ属、ミズアオイ属などの水田雑草も生育していたと考えられる。森林植生としては、遺跡周辺にスギ林が分布しており、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、ハンノキ属、クリなども生育していたと推定される。

遺物包含層の6層でも、おおむね同様の状況であったと考えられるが、この時期には周辺でソバ属、アブラナ科、ササゲ属などを栽培する畑作も行われていたと推定される。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

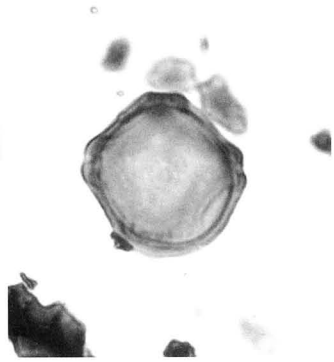
表1　小西北遺跡における花粉分析結果

分類群		基本土層			
		北壁		南壁	
学名	和名	6層	7層	6層	7層
Arboreal pollen	樹木花粉				
Abies	モミ属	2		1	1
Tsuga	ツガ属	1	1	1	1
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	5	1	2	4
Pinus subgen. *Haploxylon*	マツ属単維管束亜属	2			1
Cryptomeria japonica	スギ	93	86	64	78
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1	1		
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	15	10	11
Juglans	クルミ属	1	2	1	
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1	3	1	2
Alnus	ハンノキ属	11	17	15	30
Betula	カバノキ属	5	6	4	8
Corylus	ハシバミ属	2			
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	3	5	2	4
Castanea crenata	クリ	5	1	1	4
Castanopsis	シイ属	4	7	3	2
Fagus	ブナ属	6	14	7	7
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	16	17	10	7
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	20	26	9	14
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1	8	3	8
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	3	3		
Aesculus turbinata	トチノキ		2		1
Cornus	ミズキ属	3			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	4	3	1	6
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	1	1		
Alisma	サジオモダカ属	1			1
Sagittaria	オモダカ属	2	8		3
Gramineae	イネ科	127	79	104	87
Oryza type	イネ属型	15	17	8	28
Cyperaceae	カヤツリグサ科	107	60	108	76
Eriocaulon	ホシクサ属	1		2	
Monochoria	ミズアオイ属		3		2
Polygonum	タデ属			1	
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1	1	2	1
Fagopyrum	ソバ属	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科			1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1		3	1
Cruciferae	アブラナ科	10		4	
Vigna	ササゲ属	2			
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	1			
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1		2	
Apioideae	セリ亜科			1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1	2	
Asteroideae	キク亜科	1	1	2	5
Artemisia	ヨモギ属	30	19	34	23
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	176	232	135	230
Trilate type spore	三条溝胞子	4	2	4	1
Arboreal pollen	樹木花粉	186	215	134	183
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	4	3	1	6
Nonarboreal pollen	草本花粉	303	190	274	227
Total pollen	花粉総数	493	408	409	416
Unknown pollen	未同定花粉	6	6	3	1
Fern spore	シダ植物胞子	180	234	139	231
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)

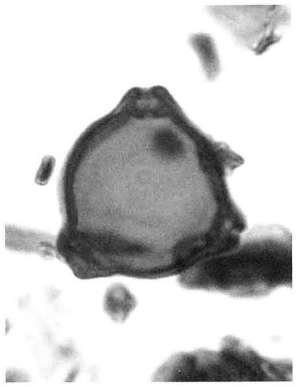
小西北遺跡の花粉・胞子

1　マツ属複維管束亜属

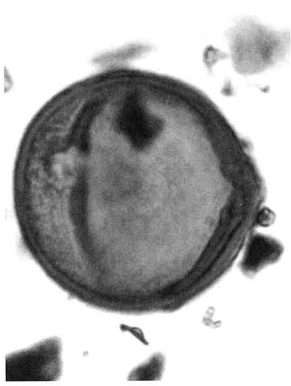
2　スギ



3　ハンノキ属



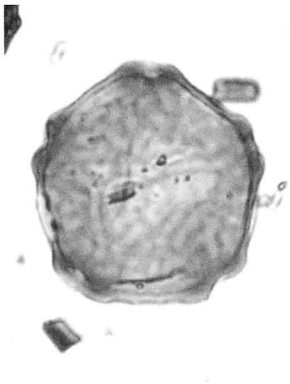
4　カバノキ属



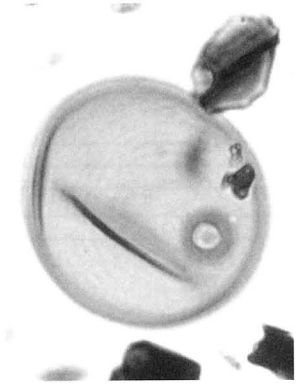
5　ブナ属

6　コナラ属コナラ亜属

7　コナラ属アカガシ亜属

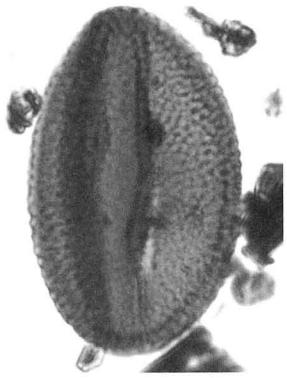


8　ニレ属―ケヤキ

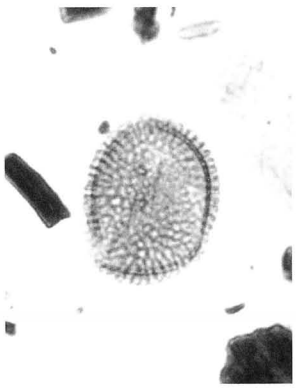


9　イネ属

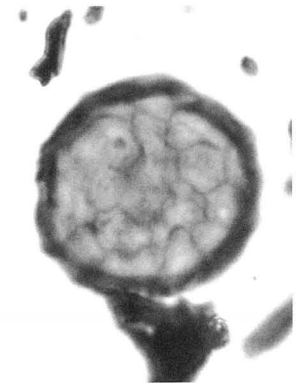
10　カヤツリグサ科



11　ソバ属

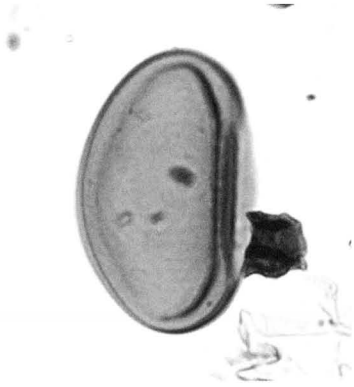


12　アブラナ科



13　ササゲ属

14　ヨモギ属



15　シダ植物単条溝胞子

―― 10μm

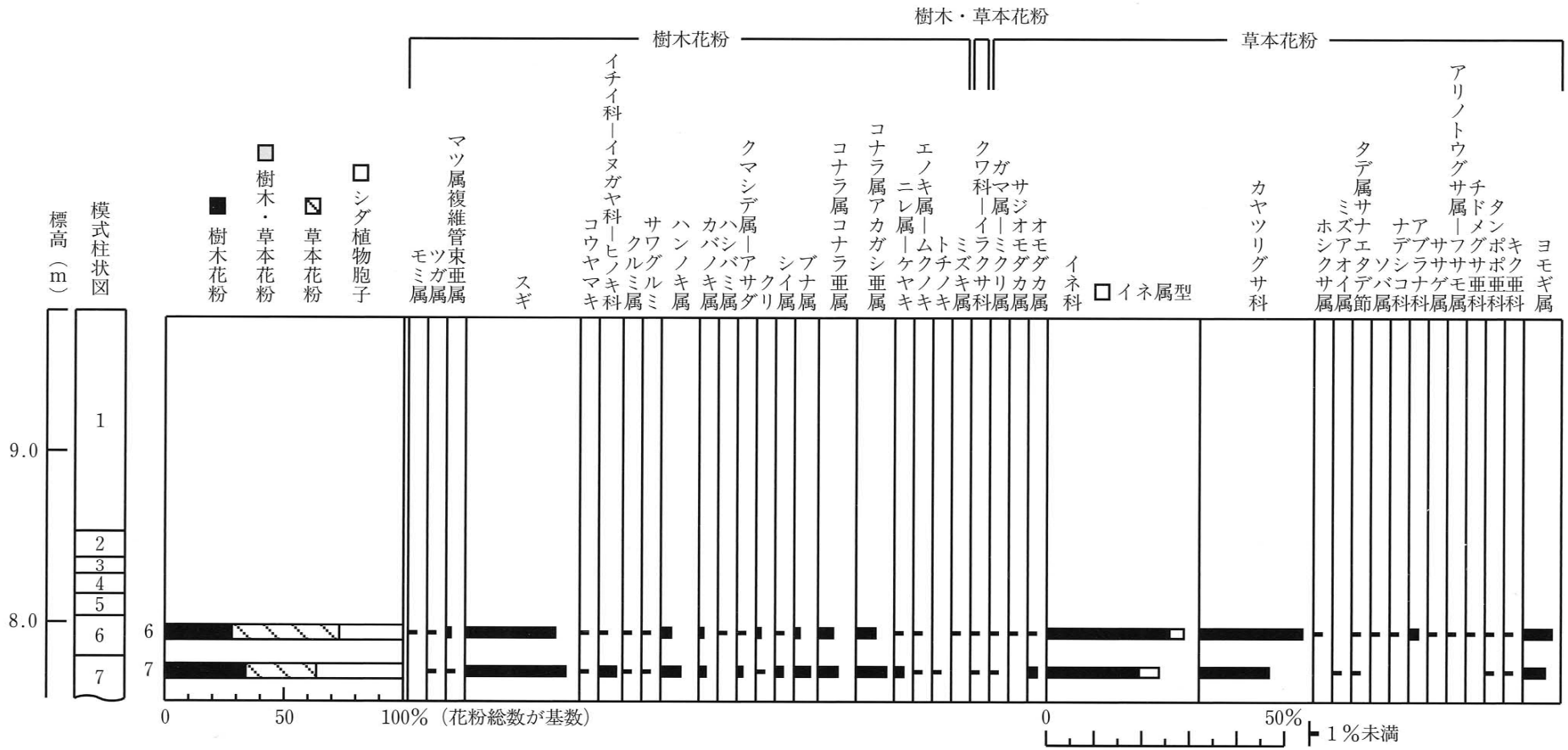


図1　小西北遺跡、基本土層北壁における花粉ダイアグラム

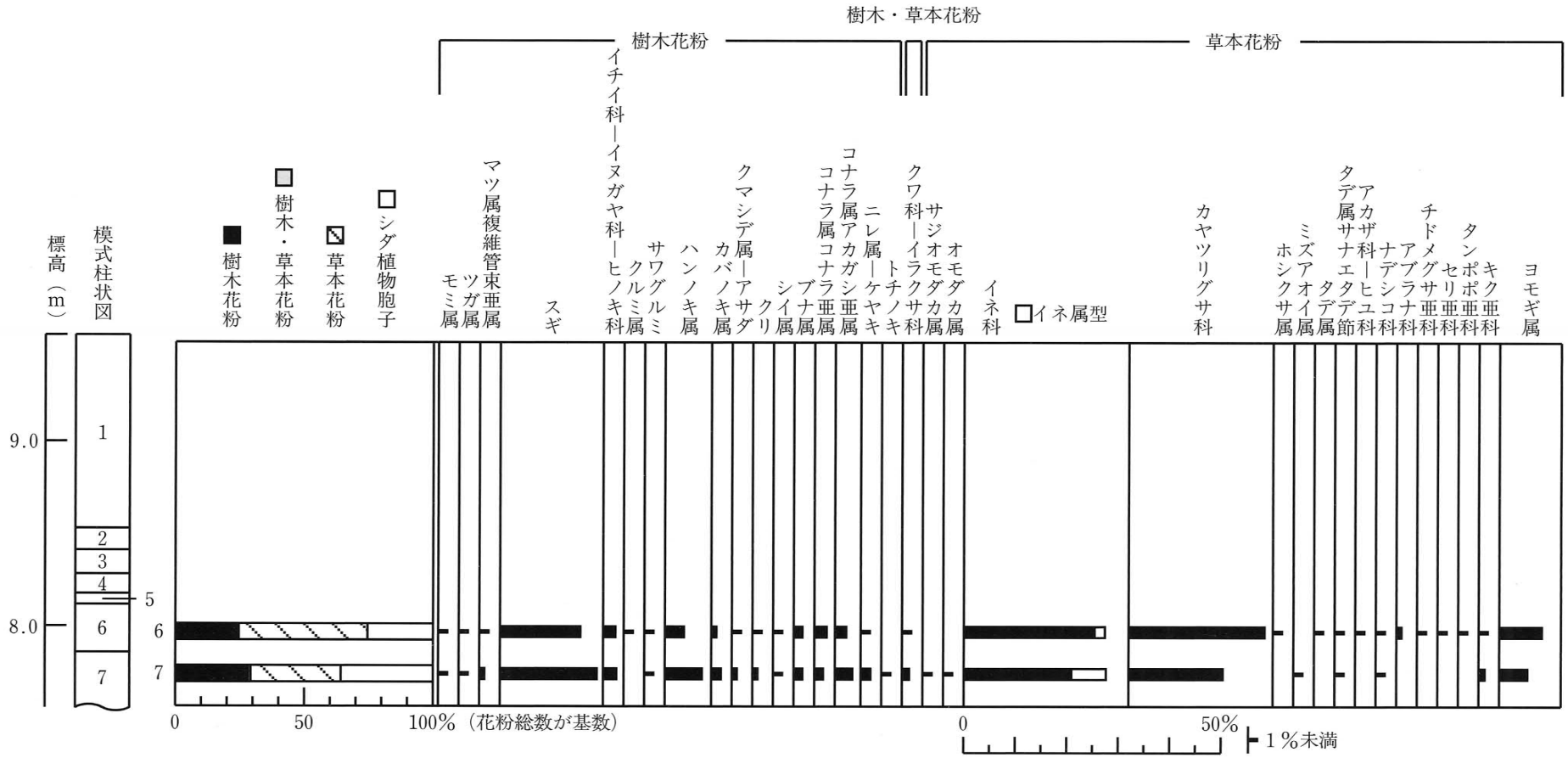


図2　小西北遺跡、基本土層南壁における花粉ダイアグラム

(2) 小西北遺跡における樹種同定

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、戦国時代末期から江戸時代初頭（16世紀後半から17世紀初め）の豪族居館跡に伴う溝遺構（SD-４）の埋土から出土した木材６点である。

3．方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　図版１

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、高さ40ｍ、径２ｍに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　図版２

横断面：小型で丸い、放射方向にややのびた道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合し、散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科　図版３

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～２列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞で、

大きくふくらんでいるものが見られる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は１～７細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ20～25ｍ、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50ｍ、径３ｍに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

散孔材　diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。放射断面：道管が存在する。接線断面：多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、本試料は保存状態が悪く変形が激しいことから、散孔材の同定にとどめた。

５．所見

分析の結果、SD-４の埋土から出土した木材は、スギ３点、ヤナギ属１点、ケヤキ１点、散孔材１点と同定された。スギは温帯に分布し、多雨と積雪の湿潤を好み、特に中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。ヤナギ属、ケヤキも温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹である。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

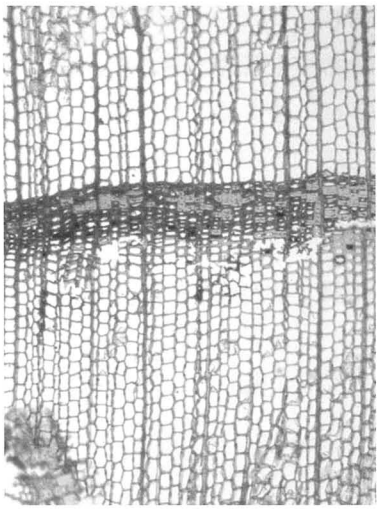
文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.

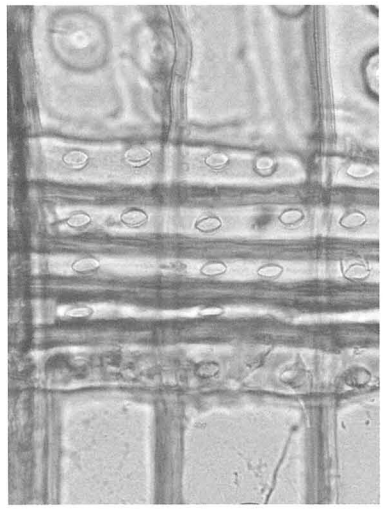
表１　小西北遺跡における樹種同定結果

遺構名	検出層位	試料番号	結果（学名／和名）	
SD-4	第１層	No.2（41）	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
SD-4	第１層	No.6（45）	*Cryptomeria japonica* D. Don	スギ
SD-4	第２層	No.9（48）	*Salix*	ヤナギ属
SD-4	第１～２層	No.10（49）	*Cryptomeria japonica* D. Don	スギ
SD-4	第１層	No.14（53）	*Cryptomeria japonica* D. Don	スギ
SD-4	第２層	No.17（56）	diffuse-porous wood	散孔材

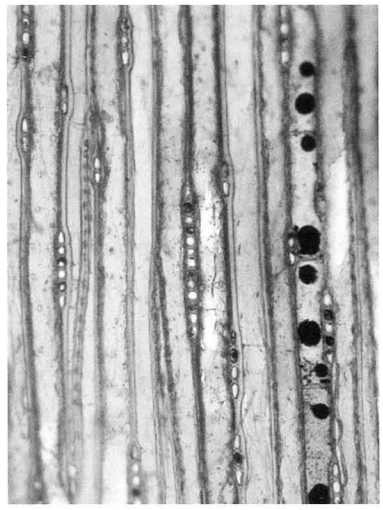
小西北遺跡の木材



横断面 ―――― ：0.5 ㎜



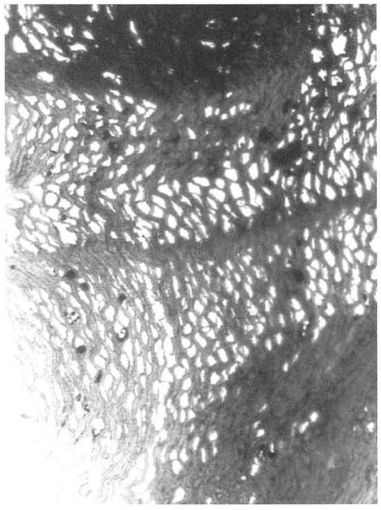
放射断面 ―――― ：0.05 ㎜



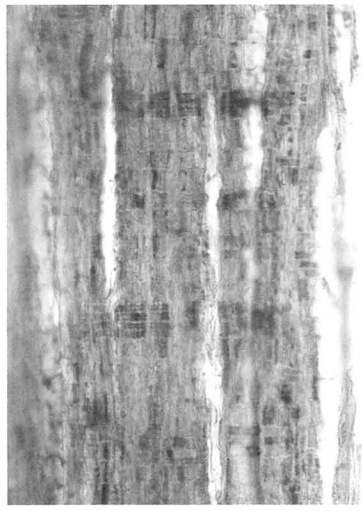
接線断面 ―――― ：0.2 ㎜

1．SD-4　第1～2層　No.10（49）

スギ



横断面 ―――― ：0.5 ㎜

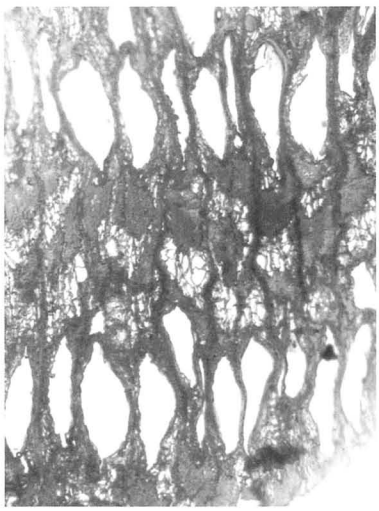


放射断面 ―――― ：0.2 ㎜

接線断面 ―――― ：0.2 ㎜

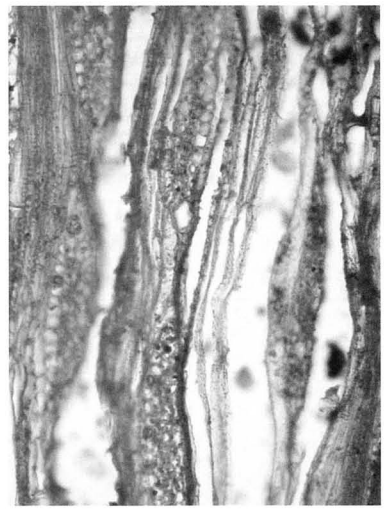
2．SD-4　第2層　No.9（48）

ヤナギ属



横断面 ―――― ：0.5 ㎜

放射断面 ―――― ：0.2 ㎜



接線断面 ―――― ：0.2 ㎜

3．SD-4　第1層　No.2（41）

ケヤキ

(3) 小西北遺跡から出土した昆虫遺体の同定

1．試料

試料は、戦国時代末期から江戸時代初頭（16世紀後半から17世紀初め）の豪族居館跡に伴う溝遺構（SD-４）の埋土第１層から出土した２点の昆虫遺体である。

2．方法

試料は、土壌が固着して乾燥した状態であった。そこで、水に浸して柔らかくしたのち、土壌中から昆虫遺体を注意深く取り出して洗浄した。なお、昆虫遺体は脆くて破損の恐れがあるため、完全に土壌を取り除くことはできなかった。これらを、顕微鏡で観察して、種類と部位の同定を行った。

3．結果および考察

分析結果を表１に示す。試料№39は、ガムシ？（*Hydrophilus acuminatus*？；ガムシ科）の左上翅の一部と同定された。ガムシは、北海道、本州、四国、九州に広く分布し、おもに平地の池や沼などの止水域に生息している。水際に水生植物が繁茂した環境を好み、水中で水草や小動物の死体などを食べる。

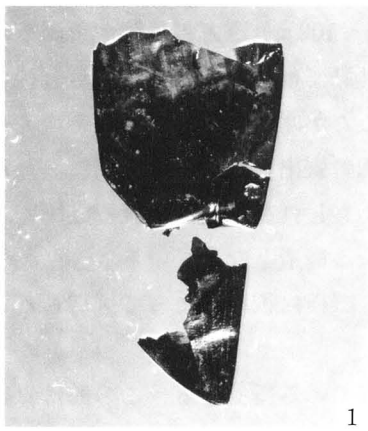
試料№40は、スジコガネ亜科の一種（Rutelinae；コガネムシ科）の前胸背板と同定された。日本産のスジコガネ亜科には、サクラコガネ属やスジコガネ属、セマダラコガネ属など９属が含まれるが、今回の試料では属や種の同定は困難である。いずれの種も、幼虫および成虫ともに食植性であり、成虫はおもに広葉樹の葉上で葉を摂食する。

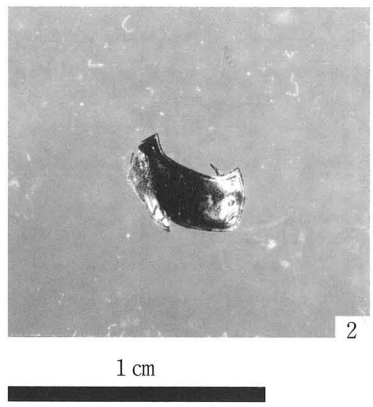
今回認められた昆虫遺体は、いずれも日本各地に広く分布する種類であり、遺跡周辺でも普通に生息していたと考えられる。水生昆虫の検出は、遺跡の立地が沖積低地であることと調和的である。

表１　小西北遺跡における昆虫同定結果

番号	出土遺構・層準	種　類	学　名	部　位
39	SD-4埋土第１層-1	ガムシ科 ガムシ？	*Hydrophilus acuminatus*？	左上翅の一部
40	SD-4埋土第１層-2	コガネムシ科 スジコガネ亜科の一種	Rutelinae Gen. et sp.	前胸背板

昆虫化石





1．ガムシの左上翅の一部（SD-４；埋土　第１層１）

2．スジコガネ亜科の前胸背板（SD-４；埋土　第１層２）

V　総　括

今回の小西北遺跡の調査は、調査面積および検出遺構・出土遺物など極端に少なく、資料的言及には限界がある。しかしながら、これらの資料と平成６・10年に行われた第１・２次調査の結果を傍証として、本報告をまとめてみたい。

(1)　遺構の年代（第11図）

今回の調査では、遺構に伴う明確な時期決定のできる遺物の出土はない。弥生土器から近世陶磁器まで各時代の遺物が混在して出土しており、遺構の形状からしか時代判定はできないと思われる。

遺構は、主軸を東西南北にとるものと東西南北からやや振れた一群に分けられ、時期的に前者が新しい。このことは、１次調査でのSD16･18とSD13の切り合いやSD01とSD17との関係から言える。本調査でも、SD04とSD05・06の切り合いからして言うことができる。

したがって、SD03･04やSK02･03などは、１次調査で確認された居館跡と密接な関連を持ち、そのことから時代的には、戦国時代末期の16世紀後半代と考えられる。

また、他の遺構は当然それらより古く、特にSD02は、１次調査でのSD17・19から２次調査のSD06へと連続する溝に直交する形で延びており、室町から戦国時代にかけての地割溝として捉えられるかもしれない。

(2)　遺構の性格

今回の主体的遺構SD03･04は、１次調査のSD01に設けられた橋状遺構の正面にあたり、居館北側の進入路および館周囲の道路に伴う、防禦的機能も合わせ持つ排水路と考えられよう。それは、１次調査の遺構配置図と照らし合わせると、居館のさらに外側を囲む形でSD13･14や今回検出したSD03･04が配置されており、この一画の溝が途切れていることからここに北側からの進入路があり、それに関連する遺構であろうことが推察される。

(3)　居館跡の構造復元について（第12図）

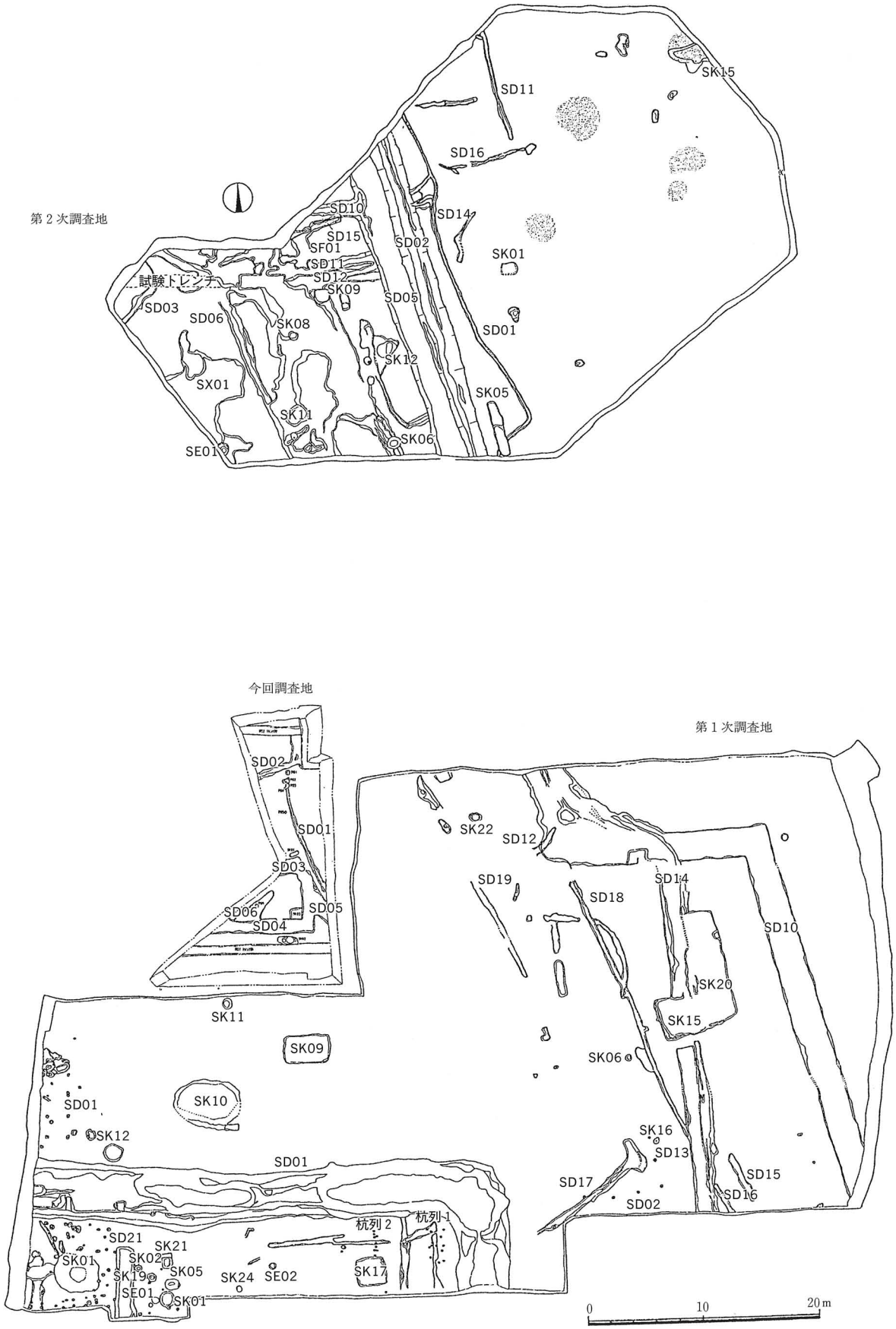
１次調査および今回の調査結果から、小西北遺跡で確認された居館跡の様子が一部窺い知れる。

居館は、幅５ｍの堀に囲まれた半町ないし一町（約50～100ｍ）四方の規模が予測され、館の四方には道路が取付けられている。この道路の外側に沿って、幅1.5ｍ前後の防禦の役目も持つ排水路が付設されている。この溝は、館の北東部で開口しており、ここが北側からの進入路と考えられる。

館北東隅の堀には、木橋を据えたと思われる橋状遺構の張出しがあり、裏門にあたる出入口と考えられる。そばにある掘立柱建物は、番屋のための建物かもしれない。橋を渡ると障壁となる板塀が立てられていた布掘りが認められ、屈曲しながら館内へ入る構造となっている。

堀の内側は、土塁ないし柵で防禦され、館の敷地内も縦横に板塀によって区切られており、所々に井戸や廃棄土坑が掘られていた。

館の中心部は、１次調査地の南西部、現在水田となっている所である。この館は、針原中町の集落に所在したとされる神保氏の居館を中心として、領内に点在していた家臣団の館のひとつであろう。



第11図　全体遺構配置図（１：500）

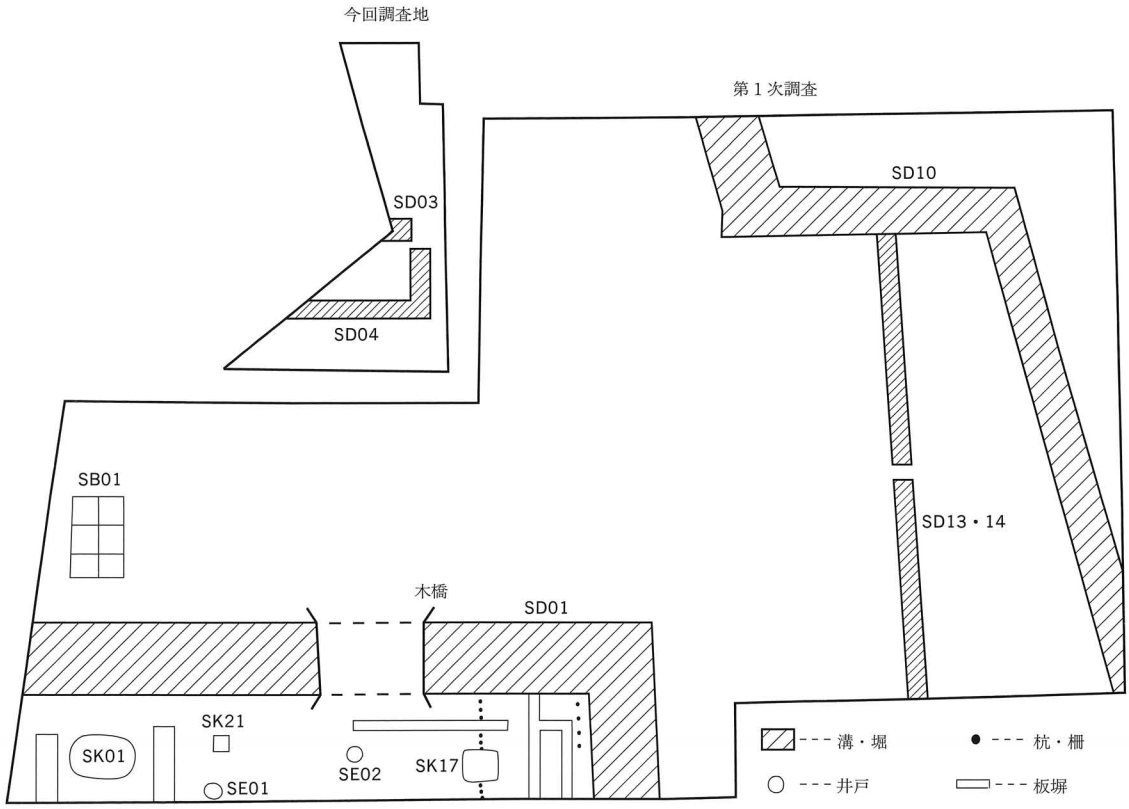
参考文献

富山市教育委員会　2000　『富山市針原中町II遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会　2000　『富山市小西北遺跡発掘調査概要』

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

古川知明　1995　「最新の発掘成果から」『富山市考古資料館報』No27

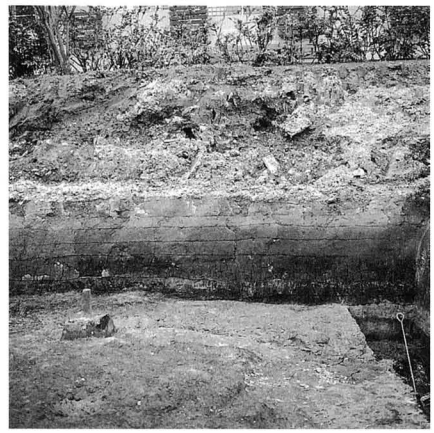


第12図　小西北遺跡居館跡推定概略図（１：500）

調査区全景（西から）

発掘区全景

基本土層状況（発掘区南壁面）



基本土層状況（発掘区北壁面）

SD01　土層状況（南から）

SD02　土層状況（東から）

SD04　土層状況（東から）

SK01　土層状況（東から）

SD01・02（北から）

SD03（東から）

SD04・05・06（西から）

SK01（東から）

SK02（南から）

SK03（南から）

SD04　出土遺物近影（南から）

SD04　出土遺物近影（南から）

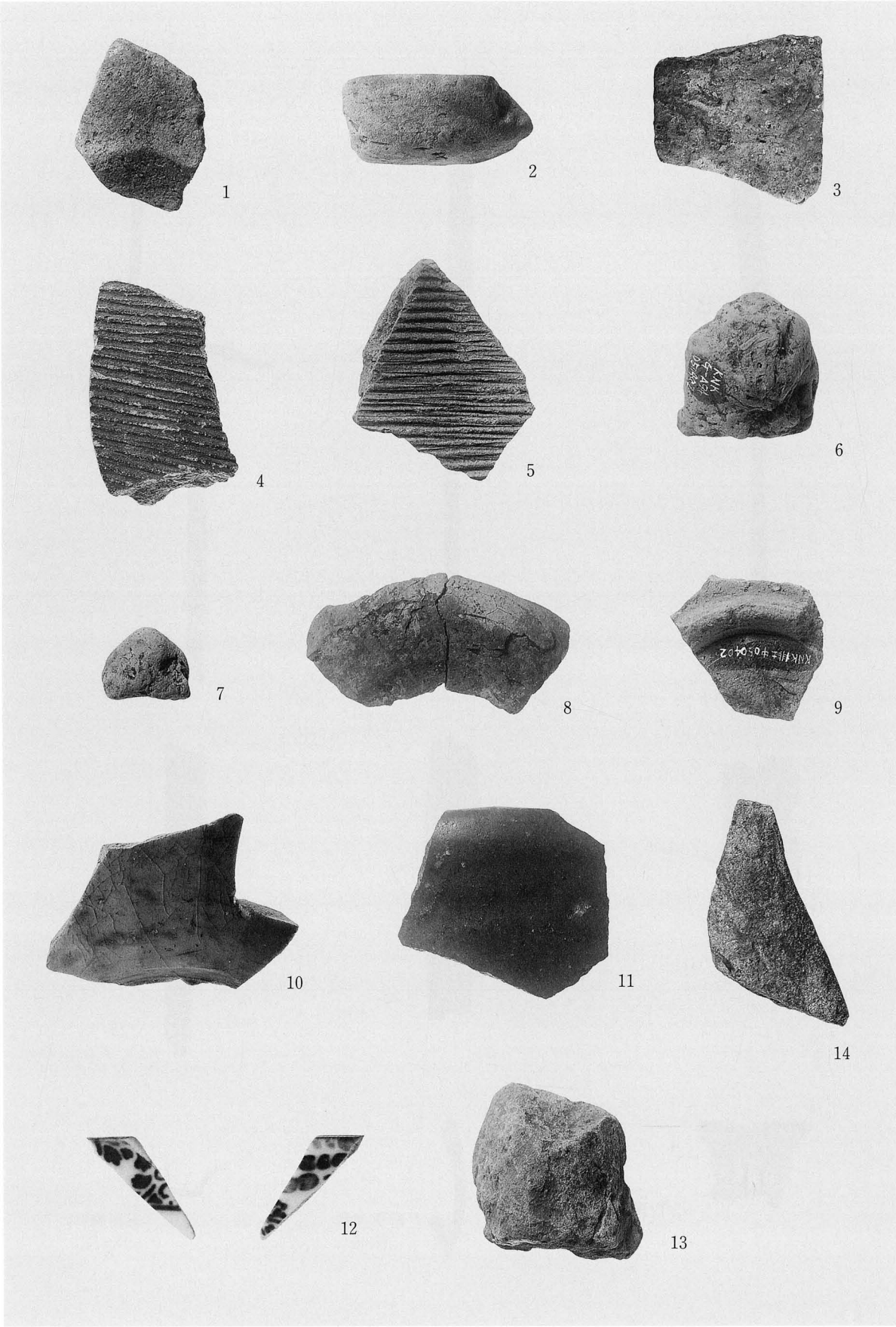
SD04　出土遺物近影（南から）

SD04　出土遺物近影（南から）

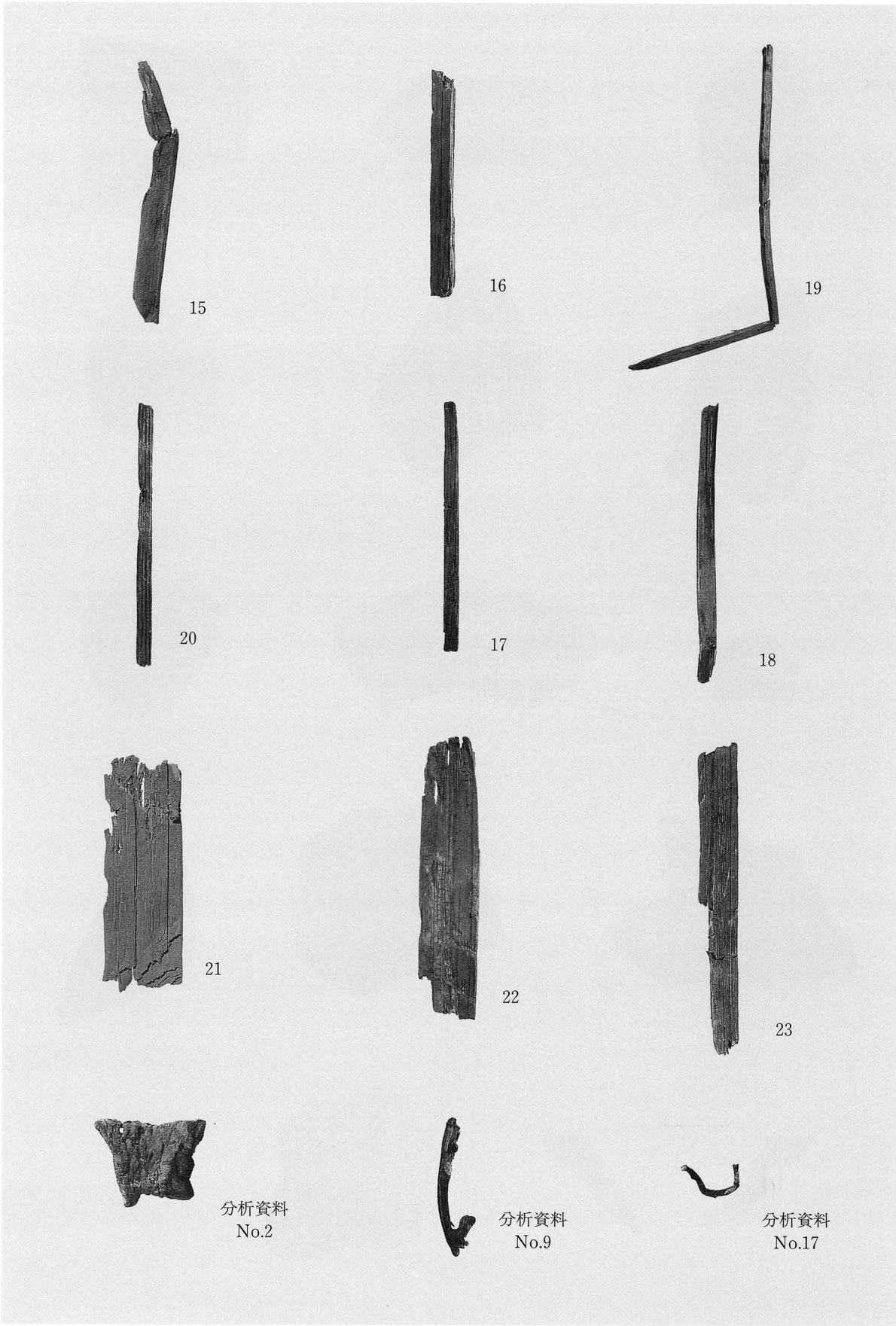
SD04　遺物出土状況（東から）

発掘区全景（東から）

発掘区全景（南から）



遺構・包含層中の出土遺物



遺構の出土遺物（SD）

報告書抄録

ふりがな	とやましこにしきたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市小西北遺跡発掘調査報告書
副書名	特別養護老人ホーム増設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1
編集者名	秀嶋龍男、古川知明
編集機関	㈱パスコ
所在地	〒930-0083　富山市総曲輪1-7-15　日本生命ビル３Ｆ　TEL.076-442-2691
発行機関	富山市教育委員会（埋蔵文化財センター）
所在地	〒930-0803　富山県富山市下新本町５番12号　TEL.076-442-4246
発行年月日	西暦2005年10月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小西北遺跡（こにしきたいせき）	富山県（とやまけん）富山市（とやまし）小西（こにし）170	162019	201211	36°43′30″	137°15′25″	20050314～20050413	450m²	特別養護老人ホーム増設等建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小西北遺跡	散布地	弥生・古代		弥生土器、須恵器、土師器	
	城館跡	中世（戦国～安土桃山）	区画溝、土坑小ピット	中世土師器、珠洲、美濃瀬戸、肥前染付、青磁、木製品（細木・薄板）	

要約	小西北遺跡の第３次調査にあたり、戦国時代末期と考えられる溝、土坑、小ピットなどが検出されている。溝は６条確認されており、そのうちＬ字状ないしコの字状に巡る溝は、第１次調査で確認された居館跡に付帯するものと考えられる。本調査で出土した主な遺物は、中世土師器・珠洲・国産陶磁器・木製品などがあり、時期的には16世紀後半とそれ以前の２時期の遺構に分けられる。小西北遺跡は、越中守護代神保氏家臣団の館のひとつと考えられる。

富山市埋蔵文化財調査報告１

富山市小西北遺跡発掘調査報告書

―特別養護老人ホーム増設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―

2005年（平成17年）10月31日発行

発　行　富山市教育委員会（埋蔵文化財センター）
〒930-0803
富山市下新本町５番12号
Tel　076－442－4246
Fax　076－442－5810
E-mail：maizoubumka-01@city.toyama.lg.jp

編　集　㈱パスコ
富山市総曲輪1-7-15　日本生命ビル３Ｆ
Tel　076-442-2691

印　刷　九州電算㈱
Tel　0952-71-8550